

以上のような地形的特徴を示す台地、低地の土地利用状態を概観してみよう。
台地は主として畑地その他樹園地、林地として利用され、低地は水田に利用されている。この地域の土地利用は常陸台地、両総台地によって代表される関東東的性格即ち耕地の発達程度が低く平地林などの未開墾地を多く残し土地利用も相対的即ち水田は一毛作で反当収量も低く畑は自給的色彩の濃い作物が栽培され農家一戸当りの経営面積も広いというような特色をもうっている。然し一面では山麓部に於ける気温の逆転という特殊条件も加わって山麓地帯にまで果樹栽培が取り入れられ東京から90kmという位置の条件から東京を市場とする産果果樹の導入も始められているなどの特徴も有している。だが依然として古くから取り入れられてきた米、麦、煙草が現在でもこの地域の換金作物として主要な地位を占めており山に囲まれ交通を阻害されてきたというこの地域の位置や、住民の意欲などの条件と相まって停滞的な土地利用を示している。

房総半島における河岸段丘地域の 地形と土地利用

—— 湊川および小糸川流域の例 ——

野崎 香奈子

I はじめに

この卒業論文は、ある小地域の地形と土地利用の現状を把握する場合、自分での程度まで調査し、まとめ上げることが出来るか、ということを確認してみることに目的を置いている。いいかえると、地形および土地利用についての調査は、その地域の性格を知る上の一助として行ったのであって、最初からこの調査に特別な目的を持たせているわけではない。

調査地域は房総中部の湊川、小糸川両流域とした。この地域の選定にあつては、①地形が土地利用の少なくともいずれかに興味を持ってそうなる独自性を持つこと ②資料が適当にあつて、なお且つあまり研究されつくされていないこと。③現地調査に障害が少ないこと ④2万5千分の1の地形図が揃っていること。などを考慮した。

なお、地形及び土地利用とも調査地域内の詳細にふれる前に、房総半島の地形および地質、千葉県下における土地利用についての概観を試みた。

II 地 形

房総半島一帯は、一般にオミ系以降の新しい地質よりなり、且つ地盤運動の跡が著しい。従つて調査地域の両河川流域にも、数段の河岸段丘がみられ

る。地形調査では、主としてこの段丘面の分類に注目した。

段丘面は両流域共比較的下位のものに連続的によく保存されているが現在の河床面より50mから100mも高い所の面になると周囲の地形との関係から一概に段丘面とはいきれなくなってくる。従って河川周辺に分散する様々な平坦面のうち段丘面として取り上げるべきものを先ず選定することが必要となる。その方法としては両流域共河川の一般方向における縦断面に平坦面を投影し上流より下流まで比較的連続して追跡出来るものを送付ことにした。これによると段丘面は両流域とも大きく五段ほど分類される。恐らくその段丘面は①河床との比高②分布面積などの点から各段ごとにそれぞれ両流域間で対比されることがわかる。従って段丘面の堆積物などを見る際にはこのことを前提として両地域を通して比較してみることにした。

現地では主として各々の段丘面の礫層および関東ローム層について見てまわった。礫層についてはその厚さの大小から局所的な地盤運動を推定するのも興味深い問題と思われたが小糸川流域ではほとんど礫層らしきものが見られず、また奥川流域では礫層は見られても一般にあまり厚くなく且つ基盤の地形に大きく左右されており系統立てて考察することは不可能であった。もしもこの内題をテーマとするのなら段丘面のうち上流より河口まで連続して分布する面であるオ四面かオ五面の何れか一つの面のみについて詳細に調べるのが妥当であると思われる。

関東ロームについては両地域ともオ二面までは確かに存在しオ四面以下は存在しないことが確認された。オ三面上のものは水成ロームらしい感がある。

以上の考察のうち①小糸川流域の礫層の有無②両流域のオ三面上のロームの有無③オ一面より高い所に位置する平坦面の性質の三点についてはもっと詳細な調査を要する。

なお、段丘面の考察の前に、両河川の間中に位置する鹿野山ないし鬼泪山を構成している地形について、成因的な考察を試みたが、これは段丘とは直接関係なく両河川流域の地域的特色を掴む上からは蛇足の感がある。

Ⅴ. 土地利用

両流域とも土地利用は地形との関係が明白でいずれもオ四、オ五面がほとんど水田、オ三面上は畑地ないし森林である。生活の中心はオ四面であるから水田耕作を主とした農業経営が行われているといえる。

段丘地形の水田耕作では、水利の方法について何か特殊性があるように思われたが、電気揚水の普及した今日では別に取り立てるほどのこともなく、かえって小糸川流域以北に広く分布する掘抜き井戸と地形地質との関係につ

いて調べた方が興味深かったと思われる。

ところで、木田中心の農業経営方式に対しては従来いくらかでも経済的面の向上を計ろうとしているいろいろな努力がなされてきた。その主なものとして①稲の早期栽培 ②裏作物の転換 ③果樹や乳牛の導入、などがある。これらの問題についての検討を試みるには従来農業経営に複雑に作用していると考えられる様々な要素について考察してみる必要があるが資料蒐集の時間的余裕を欠き表面的な現状を知ること以上は何ら発展しなかったのは残念である。

Ⅳ おわりに

結論として最初の目的とした地形、土地利用の現状把握の限度について村地形の一部しか見られなかったが特に土地利用についての調査不足を痛感させられる。

静岡県三島周辺の地形と土地利用

古 田 進 子

目 次

はじめに

- I 調査地域概説 §1 調査地域
- §2 主として自然的な環境について
- §3 主として人文的な環境について
- II 地 形 §1 地形分類
- III 土 地 利 用 §1 各地形面と土地利用との関係
- §2 土地利用の概況

この報告の目的は題目の示すように調査地域を主として地形と土地利用の面から考察するところにある。しかしこの地域において報告者が先ず興味を感じた事実は紡績を中心とする工業地域が農業の中に孤立的存在する点であった。この報告では工業に対する説明は殆ど行われていず、工業立地の基礎を為す地下水と工業人口の面で農村の構造と関係のある点とについてそれぞれ若干の考察を行つてはすぎないが、工業に対する興味が出発点となつた為らに必ずしも地形的にまとめた単位とは看做すことのできない地域を調査地域範囲として設定することとなった。

調査地域は周知の如く伊豆半島の咽喉部を扼する地点にその位置を占め七西の愛鷹東の箱根西火山に挟まれた南北に狭い扇状地性の平野が中央に在り